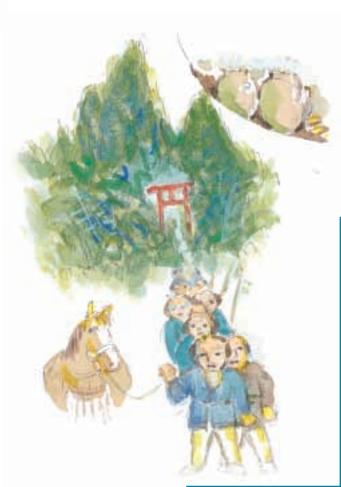
ぜんがめ丘

誰もいないのを確かめ、このことは誰にも言いませんでした。
お酒でした。「これはひともうけできるわい」と、男は言いながら、あたりを見回してのです。気のせいかもしれないと思い、何度かすくって飲んでみましたが、間違いなくをいやそうと思ったのです。泉の水を手にすくって口に含み、驚きました。お酒だったま、ある男がこの丘の下に降りて行きました。小さな泉が見えたので、のどの渇き苦、ある男がこの近の下に降りて行きました。小さな泉が見えたので、のどの渇き苦、ある男がこの近の上れないと思い、何度かはいている小高い丘があります。

ました。
に入れました。ひとつの瓶がいっぱいになると、泉の上にある丘に運び、土の中に埋めに入れました。ひとつの瓶がいっぱいになると、泉の上にある丘に運び、土の中に埋めを町に運び売ったのでした。何日もこうしているとお金がたまっていくので、大きな瓶のくる朝、男は大きな樽をかついできて泉のお酒を汲み入れました。そして、それあくる朝、男は大きな樽をかついできて泉のお酒を汲み入れました。そして、それ

を背負わせて泉に連れて行きました。そして、いつものようにお酒を汲もうとしましそのうち、樽をかついで行き来するのを難儀だと思うようになり、ある日、牛に樽



ました。た。すると、牛もトコトコ泉に近づき首をのばして飲み始めたのです。男はカッとなり

たそうです。水になっていました。何度汲んでみても同じで、その水も後には涸れて泉もなくなっ水になっていました。何度汲んでみても同じで、その水も後には涸れて泉もなくなっいました。やがて、気を取り直した男はお酒を汲もうとしましたが、それは普通の「こいは売りもんじゃ。お前に飲まれてたまるか」と牛を追いやりうち殺してしま

ます。り、お金のつまった瓶が埋められたままであるということは今もなお語り継がれていり、お金のつまった瓶が埋められたままであるということは今もなお語り継がれてい男のその後のことは、よくわかりません。しかし、そこは「ぜんがめ丘」のことであ

年一度のお祭りを行っているということです。ています。農耕馬の飼育が盛んであった頃のように(盛大ではないけれど)、現在でも丘への上り口近く、赤い鳥居が樹間に見え、この先に早馬どん(馬の神様)が祭られ

文/有馬英子 絵/二石綱夫(原話『いろり考』『有明町の文化財』)